

2023 年度 卒業論文中間報告書

複素ニューラルネットワークを用いた 円偏波地中レーダシステム

2023 年 9 月 29 日提出

指導教員 廣瀬 明 教授
夏秋 嶺 准教授

東京大学 工学部 電気電子工学科

学生証番号 03-220524

渡辺 裕貴

目次

1	序論	3
2	関連研究	3
2.1	地中レーダにおけるデータの処理	3
2.2	複素ニューラルネットワーク	4
3	複素ニューラルネットワークを用いた円偏波地中レーダシステム	5
3.1	システムの特徴	5
3.2	計測システムの構成	5
3.3	複素ニューラルネットワークを用いた解析システム	6
4	実験	6
4.1	円偏波地中レーダに用いるアンテナの設計	6
4.2	地中レーダシステムによる計測	10
5	今後の展望	10
5.1	計測システムの構築	10
5.2	複素ニューラルネットワークを用いた解析システムの構築	10

1 序論

地中レーダによる計測は、地中に向けて電磁波を放射し、地中の埋設物から散乱された電磁波を受信することで、非破壊的に地中埋設物を探査する方法である。地雷検出や遺跡調査、インフラ整備のためのパイプの検知など多くの分野に応用されている [1][2]。

地中レーダでは、送信用と受信用のアンテナのそれぞれについて2つの偏頗状態（典型的には水平偏波と垂直偏波）の2種類のアンテナを用意し、 2×2 の散乱行列を取得する場合（フルポラリメトリック）と、送信あるいは受信用のアンテナのいずれか、もしくは両方について、一つの偏波状態の電磁波のみを扱う場合がある。フルポラリメトリックの場合では、対象物の散乱の特性について詳細な情報が得られる一方で、計測に時間がかかり、送受信アンテナの偏波を切り替える必要があるために計測システムが大きくなるデメリットがある。

地中レーダに直線偏波を用いる場合では、散乱の特性が対象物の方向に依存しやすい。例えば、パイプのような直線状の対象物を直線偏波でセンシングする場合を考えると、電界の方向と対象物が平行になった時に大きな散乱が起こる一方で、電界の方向と対象物が垂直である場合には、散乱が非常に小さくなる。そのため、地中レーダに直線偏波を用いる場合には対象物の方向にかかわらず十分な散乱特性を得られるようフルポラリメトリックのシステムがよく用いられる。

一方で、地中レーダに円偏波を用いる場合には、円偏波の次のような性質から、フルポラリメトリックでないシステムであっても地中レーダシステムとして十分な機能を持つ可能性がある。一つは対象物からの散乱が対象物の方向に依存しにくいこと、もう一つは完全導体における円偏波の散乱の場合に、散乱の前後で円偏波における電界の旋回方向が反転することである。後者の性質に関しては、導体の計測対象からの1回の散乱波を受信したい場合には、散乱の前後で電磁波の進行方向が逆転することを考慮し、受信アンテナを受信偏波の旋回方向に合わせた円偏波アンテナとすることで、所望の散乱波を選択的に受信できる。

また、地中レーダデータに対してニューラルネットワークを用いた適応的な解析が行われてきており、その有効性が示されつつある [3][4]。

しかし、円偏波地中レーダでどのようにニューラルネットワークを構成知ると効果的であるかは議論されてこなかった。

2 関連研究

2.1 地中レーダにおけるデータの処理

地中レーダ技術の原理は、送信アンテナから地表に向かってパルス波を放射し、地中の埋設物からの散乱波を受信することで、地中の埋設物についての情報を得るものである。パルス波が放射されてからそれが対象物により散乱され受信アンテナに戻ってくるまでの時間の情報と、地中における電磁波の伝搬速度から地中における対象物の位置を推定することが可能である。パルス型の地中レーダは、実際にパルスを地表に向かって照射することで動作する。

パルス型の他に、地中レーダとして連続波周波数掃引型地中レーダ (Stepped-Frequency Continuous Wave Ground Penetrating Radar, SFCW GPR) が用いられることがある。SFCW GPRでは、実際にパルス波を放射するのではなく、単一周波数成分のみをもつ電磁波を広帯域にわたって周波数を刻んで掃引して放射し、得られた受信波の振幅および位相を逆フーリエ変換することで、パルス波を放射した場合の散乱特性を再現する [5]。

図1は、Kido et. al[2011]により行われた実験 [6] における、地中パイプの (a) パルス型 GPR (b) SFCW GPR を用いた可視化画像である。(a) は中心周波数 500MHz のパルスが用いられてお

り、(b) は 50MHz から 1.5GHz を 10.66MHz 間隔で掃引した SFCW GPR を用いた結果である。いずれの場合においても、地中のパイプからの放射に由来するとみられる双曲線関数形の信号強度の縞が可視化されており、これは地中レーダにおける典型的な信号である。

一般に、地中レーダの生データでは、土壌の不均一性による散乱が起こり、目標の信号である対象物からの反射が土壌での散乱による信号に埋もれてしまうことが問題である [7]。これを解決するために、マイグレーションという手法が用いられることがある。マイグレーションは、対象物からの反射波を反射体位置から放射されたものと考え、複数の受信点から反射波の観測を考慮することで、より精確なイメージングを図る方法である [8]。

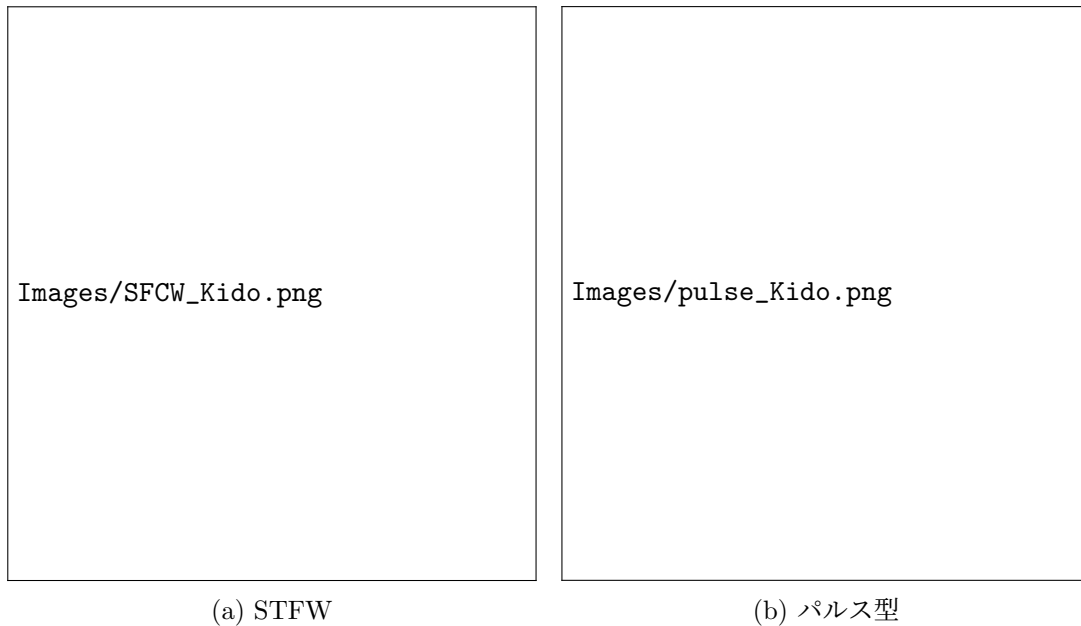


図 1: GPR システムにより可視化されたパイプ [6]

2.2 複素ニューラルネットワーク

階層型のニューラルネットワークは、入力層、出力層、これらの間の隠れ層からなる。これらの層におけるニューロンの間は荷重をもって結合されている。ニューラルネットワークの種類ごとに特有の学習の方法によりこの荷重を変化させることで、入力に対して所望の出力を得るようにする。

特に、学習の際に正解となる信号（教師信号）が与えられる学習を教師あり学習という。教師信号と出力の誤差を出力層からより前段の層に向けて逆向きに伝搬させ層間の荷重の更新を行う誤差逆伝搬法が代表的である。

複素ニューラルネットワークは、ニューラルネットワークのうち、特に入出力やパラメータが複素数であるものをいう。複素数は振幅のみでなく位相の情報を含むため、特に電磁波などの波動を扱うときに有効である [9]

具体的な学習の方法は次の通りである。第 x 層の入力を \mathbf{x} 、出力を \mathbf{y} 、荷重を \mathbf{W}_1 、バイアスを b 、活性化関数を f とすると、出力 \mathbf{x}_1 は

$$\mathbf{x}_1 = f(\mathbf{W}^T \mathbf{x} + b) \quad (1)$$

のように決定される。

3 複素ニューラルネットワークを用いた円偏波地中レーダシステム

3.1 システムの特徴

提案システムは、送受信アンテナ、これに接続されたベクトルネットワークアナライザ、XY ステージからなる計測システムと、複素ニューラルネットワークを用いた解析システムにより構成される。従来の方法では、対象物からの散乱の様子を信号処理的に推定するものである。それに対し、本システムにおけるデータ解析の目標は、対象物の向きや形状などの幾何構造や、対象物の存在する座標などの特徴量について、複素ニューラルネットワークを用いて適応的に抽出することである。

3.2 計測システムの構成

計測システムの概要図を図2に示す。文献[10]に倣い、送受信アンテナ部分は、図3に示すようにアンテナとバランを電磁波吸収体からなる中空円筒で覆う。これにより、所望の放射方向である地表面方向以外へ電磁波が放射されるのを抑制する。送受信アンテナ部分は、それぞれベクトルネットワークアナライザの異なるポートに同軸ケーブル、バランを通じて接続されている。アンテナ部分は、送受信アンテナの相対的な位置が固定された状態で、XY ステージにより実験用土槽上の任意の座標に動かすことができる。計測システムは、XY ステージによる地表面の走査を、設定した各周波数で繰り返すことで、XY ステージ上の2次元の座標と周波数ごとに、振幅と位相の情報をもつ複素数のデータが得られるように構成する。

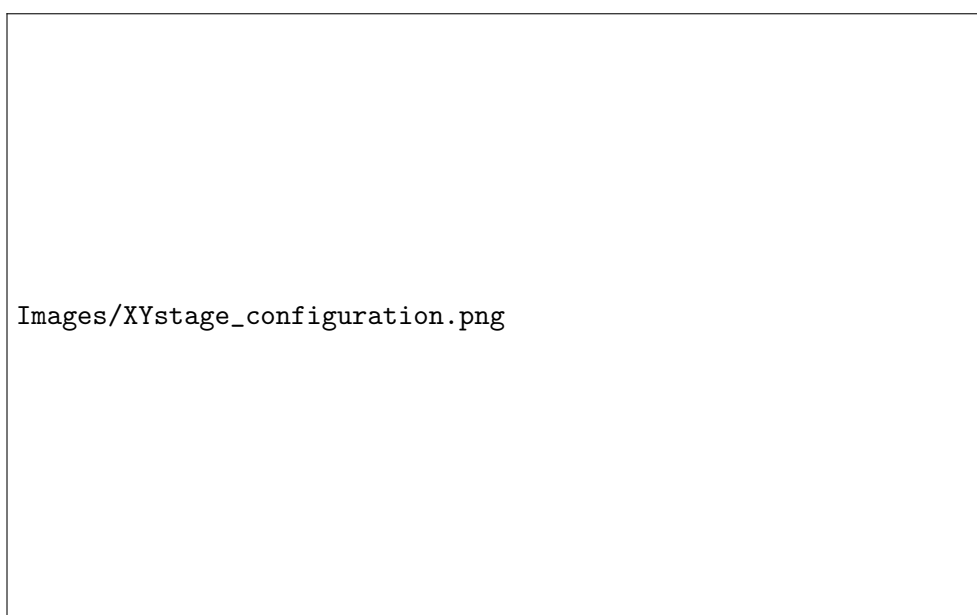


図 2: 計測システムの概略図

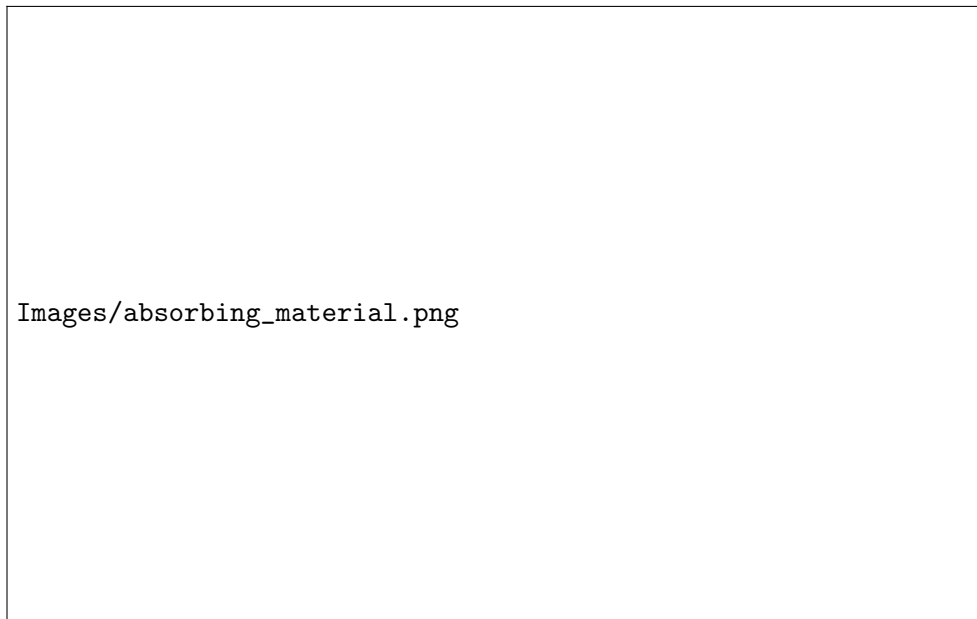


図 3: 電波吸収体で覆われたアンテナシステムの構造 [10]

3.3 複素ニューラルネットワークを用いた解析システム

計測システムにより得られた複素数データを、複素ニューラルネットワークを用いて解析する。具体的に用いる複素ニューラルネットワークは未実装であるが、その展望については 5.2 節で述べる。

4 実験

4.1 円偏波地中レーダに用いるアンテナの設計

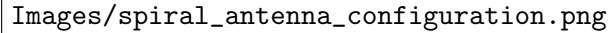
本研究では、地中レーダとして円偏波アンテナを用いる。地中レーダに用いられるアンテナとしては、スパイラルアンテナを用いる。実際の計測に際しては、ベクトルネットワークアナライザにアンテナを接続して用いる。VNA からの給電の際には、同軸ケーブルを通じてアンテナに給電するため、同軸ケーブルとアンテナの間にバランを設ける。このバランは、不平衡-平衡の変換を行うだけでなく、特性インピーダンスが 50Ω である同軸ケーブルと、一般にこれと異なる入力インピーダンス特性を持つアンテナ間のインピーダンスの整合も兼ねる。そのため、アンテナの入力インピーダンス特性を調べた上で、適切なインピーダンス変換を行うことができるように設計する必要がある。

実際に設計したアンテナおよびバランを、それぞれ図 4 および図 5 に示す。設計には、有限要素法による高周波電磁界シミュレーションソフトウェアである Ansys HFSS を用いた。

アンテナはスパイラルバランとして設計し、導体ライン幅は 3.0mm 、導体ライン間のギャップは 4.1mm とした。

バランに関して、誘電体基盤は厚さ 1mm 、比誘電率 4.6 として設計した。図 5 において、緑色部分は誘電体基盤を、灰色部分はプリント導体を表している。

設計したアンテナについて、右円偏波および左円偏波について、 5GHz 、 10GHz 、 15GHz でゲインをシミュレーションにより計算した 2 次元にプロットしたものを図 6 に示す。また、このうち



Images/spiral_antenna_configuration.png

図 4: 設計したスパイラルアンテナの構造

右円偏波については、5GHz、10GHz、15GHz の角周波数での放射パターンの 3 次元で可視化したものを図 7 に示す。このアンテナは地中レーダに用いるため、所望の偏波状態については、地面に向いている面についてのみ高いゲインを持っていることが望ましい。図 6 から、アンテナ面に対して地面と反対側の面についてはゲインが概ね -10dB_i 以下と低く抑えられている一方、地面に向ける面の鉛直下向きから $\pm 30^\circ$ 程度の範囲についてはゲインが各周波数で 6dB_i 程度と高く設計できていたことがわかった。

また、設計したアンテナの軸比の周波数特性のシミュレーションによる計算結果を図 8 に示す。5GHz - 15GHz にわたって軸比が $< 3\text{dB}$ 、特に 5GHz - 7GHz では軸比が 0.5dB 以下となっていて、円偏波アンテナとして良好な軸比特性であることが確認できた。

さらに、設計したアンテナの入力インピーダンスの周波数特性を図 9 に示す。入力インピーダンスの実部は周波数に対して、5GHz から 15GHz の範囲で、 190Ω 程度から 150Ω までおよそ線形で減少する特性を示していた。

テーパバランのマイクロストリップライン部分の設計については、マイクロストリップライン幅は、同軸給電入力部とアンテナ接続部のそれぞれにおいてインピーダンスが整合するよう設計するのが望ましい。これらの幅 w は、誘電体基盤の厚み h および基盤の比誘電率 ϵ_r から計算できる [11],[12]。同軸給電部のマイクロストリップライン幅は、その特性インピーダンスが同軸ケーブルの特性インピーダンスと同じ 50Ω となるよう、文献 [11] を参考に計算し $w_{\text{in}} = 1.8\text{mm}$ とした。アンテナ接続部のマイクロストリップラインについては、アンテナの入力インピーダンスと整合させるためには周波数依存性を持たせるのが望ましいが、単純なペアマイクロストリップラインでは特性インピーダンスに周波数依存性を持たせるのが困難であるため、特性インピーダンスが 160Ω 程度となるよう、文献 [12] を参考に $w_{\text{out}} = 0.2\text{mm}$ とした。

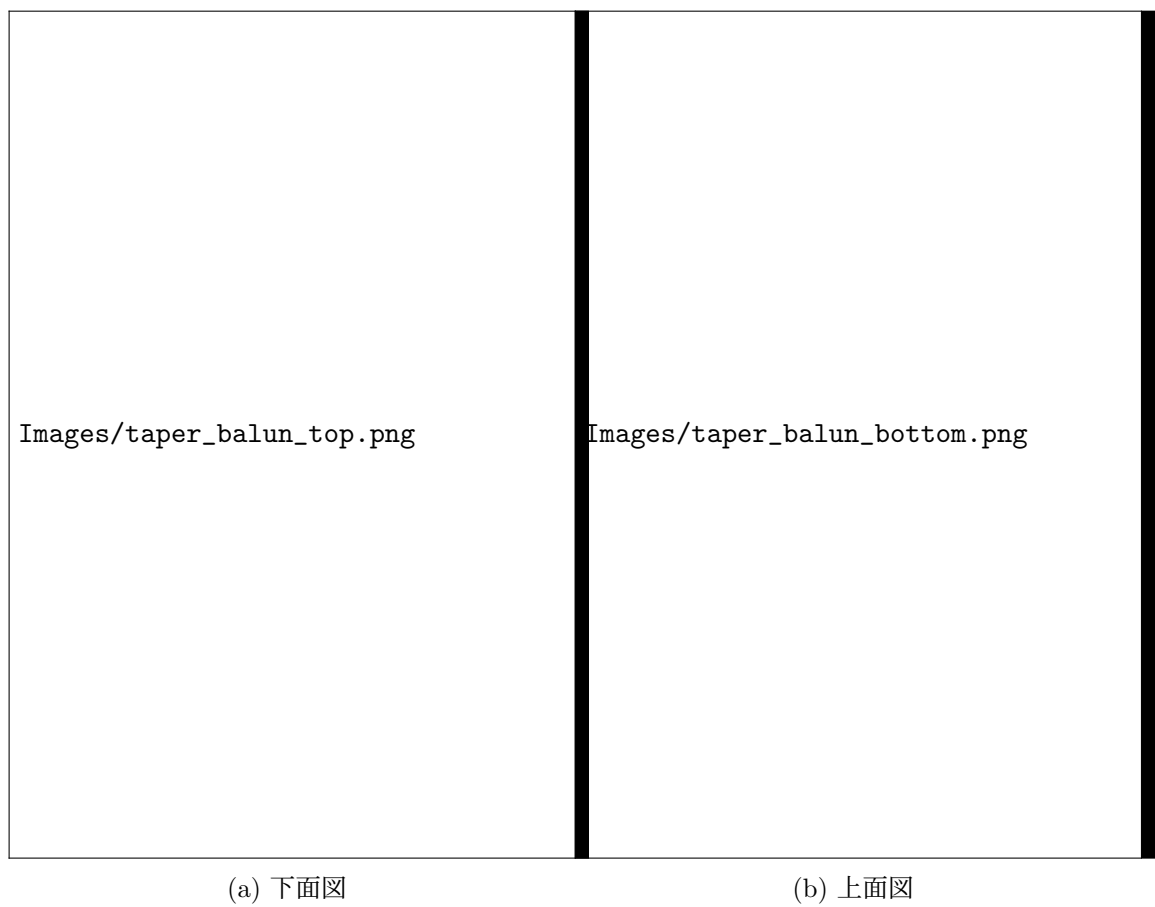


図 5: バランの構造

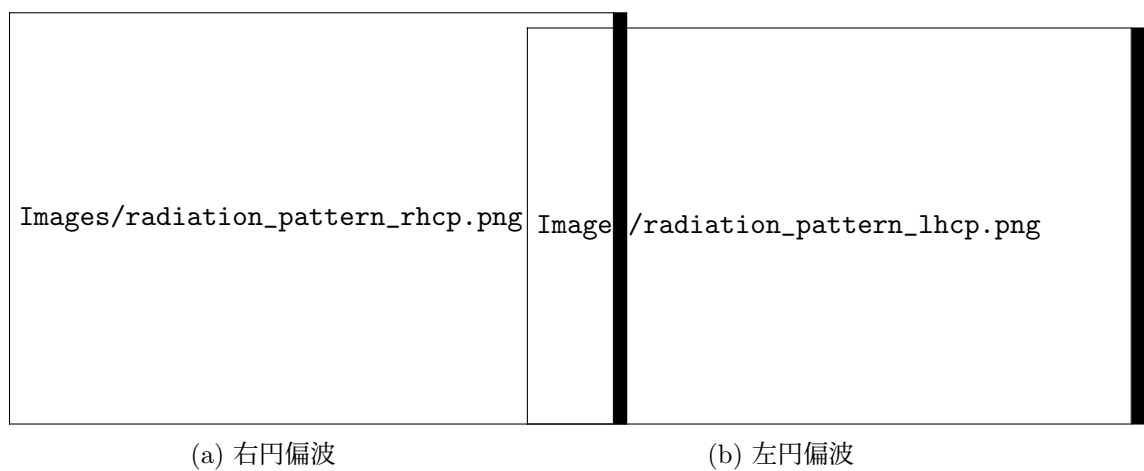


図 6: 放射パターンの 2 次元プロット

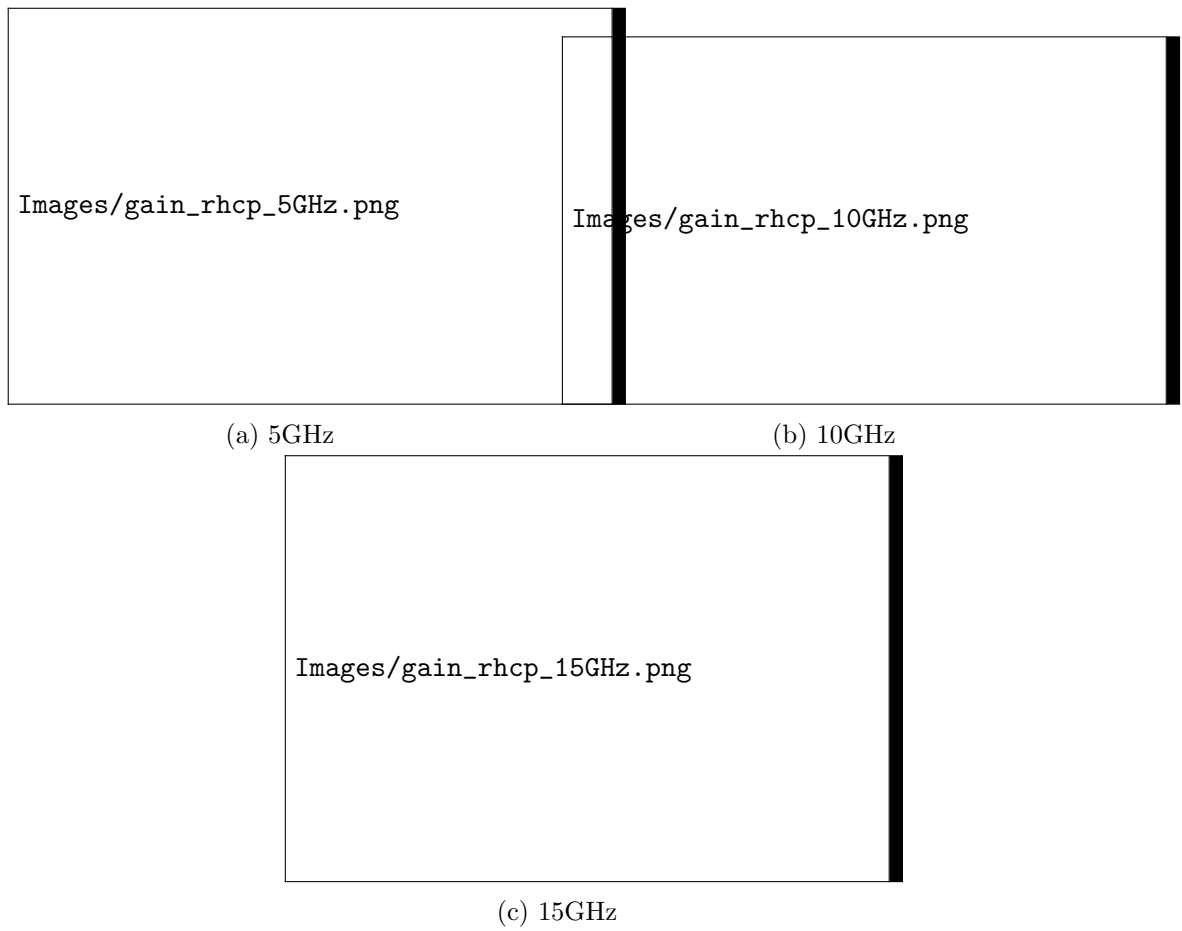


図 7: 放射パターンの 3 次元プロット

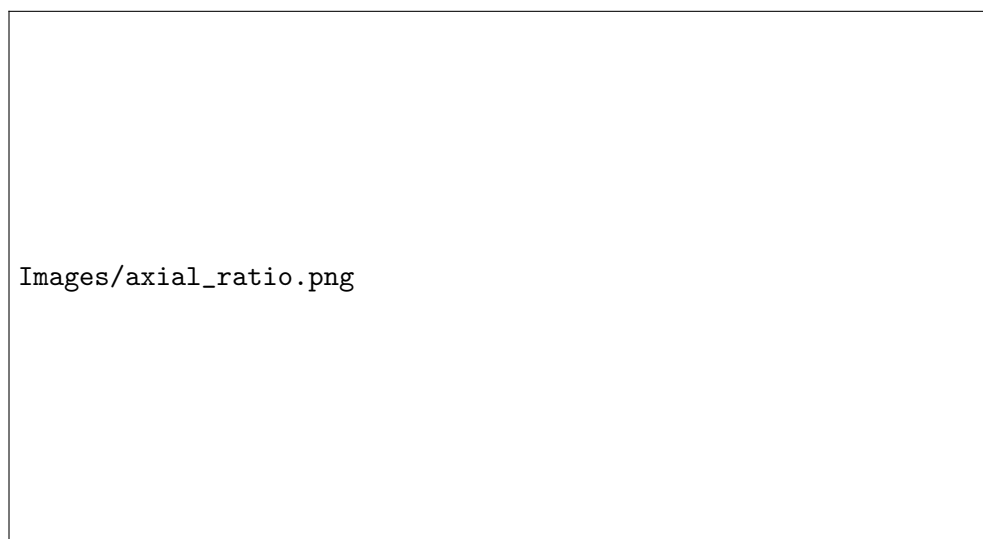


図 8: 設計したアンテナにおける軸比の周波数特性

Images/spiral_impedance.png

図 9: 設計したアンテナにおける入力インピーダンスの周波数特性

4.2 地中レーダシステムによる計測

複素ニューラルネットワークの学習及び検証に用いるデータは、先述の計測システムを用いて取得する。計測対象としては、鉄パイプ管を用いた。以下の条件の通り計測を行なった。

表 1: 実験条件のまとめ

実験条件	パラメータ 1	パラメータ 2
条件 1	値 1	値 2
条件 2	値 3	値 4

4.3 複素ニューラルネットワークを用いた解析

5 今後の展望

5.1 計測システムの構築

アンテナやバラン部分については、Ansys HFSS を用いた設計自体は行ったが、実際に基盤加工器などを用いた部品の作成は未完了である。まずはこれを完了させ、実際に計測システムが動作することを確認したい。計測対象としては鉄パイプ管を用い、その深さや向きを様々に変えてデータ収集を行うことを想定している。

5.2 複素ニューラルネットワークを用いた解析システムの構築

本研究は、複素ニューラルネットワークを用いて、円偏波地中レーダシステムにより取得したデータから、対象物の向きや形状などの幾何構造や、対象物の存在する座標などの特徴量を抽出することを目標としている。本実験では鉄パイプ管を用いるため、特徴量としてパイプの深さや向きを出力できるような複素ニューラルネットワークシステムの構築を模索する予定である。シ

システムの構築に際して考慮すべき点としては、教師データの与え方、入力データの形式、隠れ層の層数や各層のニューロン数、学習方法や学習におけるパラメータなどがあると考えられる。これらを適切に設定し、より高精度なシステムを構築したいと考えている。

参考文献

- [1] T. Montoya and G. Smith, “Land mine detection using a ground-penetrating radar based on resistively loaded vee dipoles,” *IEEE Transactions on Antennas and Propagation*, vol. 47, no. 12, pp. 1795–1806, 1999.
- [2] J. J. Schultz, M. Grasmueck, R. Weger, N. Muztaza, M. Saidin, I. Azwin, R. Saad, H. Kofun, and G. Leucci, “Detecting buried remains using ground-penetrating radar,” *Department of*, 2012.
- [3] C.-C. Yang and N. Bose, “Landmine detection and classification with complex-valued hybrid neural network using scattering parameters dataset,” *IEEE transactions on neural networks*, vol. 16, no. 3, pp. 743–753, 2005.
- [4] S. E. Yuksel, J. Bolton, and P. Gader, “Multiple-instance hidden markov models with applications to landmine detection,” *IEEE Transactions on Geoscience and Remote Sensing*, vol. 53, no. 12, pp. 6766–6775, 2015.
- [5] T. Kido, Y. Yokota, F. Kawahara, and M. Sato, “Wide band stepped-frequency ground penetrating radar,” in *2011 IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium*, pp. 55–58, 2011.
- [6] 城戸隆 and 佐藤源之, “広帯域連続波周波数掃引型地中レーダ,” *物理探査*, vol. 69, no. 4, pp. 269–279, 2016.
- [7] X. Feng and M. Sato, “Pre-stack migration applied to gpr for landmine detection,” *Inverse Problems*, vol. 20, p. S99, nov 2004.
- [8] T. Tamura, K. Watanabe, and Y. Saito, “Subsurface imaging by the ground penetrating radar,” 2004.
- [9] A. Hirose, *Complex-valued neural networks*, vol. 400. Springer Science & Business Media, 2012.
- [10] Z. Xiao, J. He, and P. Liu, “Study of a planar spiral antenna used in ground penetrating radar system,” in *2008 China-Japan Joint Microwave Conference*, pp. 250–252, 2008.
- [11] E. O. Hammerstad, “Equations for microstrip circuit design,” in *1975 5th European Microwave Conference*, pp. 268–272, 1975.
- [12] B. C. Wadell, *Transmission line design handbook*. The Artech House microwave library, Artech House, 1991.